

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 135 号

平成25年7月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

小西芳之助「ローマ人への手紙 講解説教」より (14)

キリスト教道徳についての感想

数回にわたって学びましたキリスト教道徳の教えを通して、私が感じますことは、パウロ先生は、救われて、永遠の生命を頂いて、復活の望みを持って喜んでおられる。その自分の福音をどうにかして未信者の方々に知らせてあげたい。未信者の方々にそれを述べ伝えたい。その福音を述べ伝える一つ的手段、道具としてキリスト教道徳を行なっておられる。また、それを勧めておられるように感ずるのであります。もし我々に、本当に救われた、永遠の生命を頂いたという信仰がなければ、すなわち、復活の望みがなければ、この道徳の教えは宙に浮いてしまう。これが地につくためには、どうしても信仰、すなわち、8章までに学んだ「万人罪人の信仰」、「贖罪の信仰」、「復活の信仰」がガッチリと我々に入っていないと

らない。道徳はその上に乗っています。そういう感じがする。この有難い教えを、この自分の幸福、喜びをどうにかして宣べ伝えたいという、このパウロの熱望がキリスト教道徳となって現われている。これは樹木（万人罪人の信仰、贖罪の信仰、復活の信仰）から出た「実」なのであります。この「実」が大切です。人類社会が幸福になるか、不幸になるかは、この「実」によって決まる。我々がこれをどの程度実行するかによって、この世が幸福にもなり不幸にもなります。その意味で、この「実」がロマ書の中心であるとも言えるのであります。これが外へ「愛」として現われてこそ、社会にものを言うことができます。心の中にあるだけでは、分かりません。道徳というものがいかに大切であるか、我々は 8 章までを学んだと同じ熱心さを持って、これを学ぶ必要があります。

(P. 392)

敵を愛せよ

山上の垂訓（マタイ伝5章38節以下）でも、敵を愛せよ、敵のために祈れ、とイエスは教えておられます。イエスは、ご自分の生涯を持って、これを説明された。そうですから、キリスト教道徳においては、「敵を愛する」ということが頂点であります。これをどれだけ行ない得るかということが、我々がどれだけ信仰があるか、というバロメーターになる。パウロは、「天国は言葉ではない、力である。君等の力を見せてくれ」と言いました。我々がどれほど天国のことを話し、天国のことを知っていると思っても、この「愛敵」、敵のために祈り、敵をゆるすという精神が少しもないということであれば、これはまったくの未信者です。天国のことが全然分かっていない証拠です。司会者が祈りましたように、天国のことが分かり、我々に永遠不滅の復活の生命を頂くということが分かってくれば、聖霊を受けて、我々は信仰相応に、これを実行しなければならない。これをはっきり覚えておく必要があります。これはキリスト教道徳、キリスト教信仰のバロメーターであります。

(P. 396)

天国は言葉ではない、力だ

このロマ書 12 章を原語で静かに精読してみますと、第 3 節は「われ汝に言う。思い上がるな」と、「自分を買いかぶるな」という言葉で始まっており、「善を持って悪に勝て」という言葉で終わっています。これがキリスト教道德の冠であります。パウロは、このことが言いたかったのです。これはパウロが始めて言ったことではありません。イエス・キリストは、山上の垂訓において、「これを行なうものは幸いである」と言われた。この幸いを我々は知りません。しかし、これを、天国の幸いと言う。善を持って悪に打ち勝つとき、我々に幸いな人生が展開してきます。パウロはそれをよく知っていました。我々もまた、聖霊の働きによって、これを知ることができます。聖霊が臨む時、復活がはっきりしてくる。復活がはっきりしてきた時に、善をなす力が与えられる。パウロは、「天国は言葉ではない、力だ」と言いましたが、そういうような力のある信者が一人でもよい、この高円寺東教会から出ることを祈ります。神が、そういう聖霊の人を起こして下さることを望みます。

(P. 398)

内村先生のキリスト教は仰ぎ見る宗教

内村先生は、「私のキリスト教は仰ぎ見る宗教である。十字架の主を仰ぎ見て義とせられ、復活の主を仰ぎ見て潔められ、再臨の主を仰ぎ見て復活せしめられる。私のキリスト教は終始仰ぎ見る宗教である」と言われました。私の耳にまだ残っています。先生の弟子に一人の絵描きさんがおりましたが、彼は主を仰ぎ見ておられる内村先生の肖像画を描きました。「仰ぎ見る」というのは動作です。これほど先生は「仰ぎ見る」ことを強調されておりましたが、私はそのことがよく分からなかった。…

ロマ書 10 章 10 節「なぜなら、人は心に信じて義とされ、口で告白して救われるからである」。ここには、救いの条件が二つ書いてあります。「信じる」ことと、「口で主は救い主なり、我が主イエスよという」ことと。…70 歳を迎えてその意味が分かりました。口で、「我が主イエスよ」と言い表わすことは、救いに入る条件ではないが、救いを完成する条件である。救いに入る条件は信仰だけであるけれども、救いに入って信仰を続け、それを完成するためには、口で言い表わす必要がある、ということが、自分の経験で分からされ

ました。

(P. 402)

「主の御名をよぶ行」と「献身の行」の大切なこと

孔子が「われ十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順がう。七十にして心の欲するところに従って矩を越えず」といわれたあの言葉が、私は、非常に好きになりました。「称名」は、頭の中の信仰の問題ではない。口で言う行動の問題です。これが分かった時、同時に、内村先生の言われた「主を仰ぎ見る」という意味が分かりました。…

ロマ書 10 章 13 節には、「主の御名を呼び求める者は、すべて救われる」と書いてある。心の状態、行いの状態いかににかかわらず、「我が主イエスよ」と言うことは可能です。神の子とせられた信仰、復活の望みについては、今も 25 年前も変わりません。しかし、ロマ書の 5 つの霊的真理の内、第 4 「主の御名を呼ぶ行」と第 5 「献身の行」の重大性が分かってきた点が違います。これは救いに入る条件ではないが、救いを完成させるための条件ですので、これができないような者は天国へは行けない。紙に譬えれば、表は「主の名を呼ぶ行」、裏は「献身の行」です。この献身の行も、難しいことではありません。目の前の義務をなすのですから。 (P. 403)

パウロの国家観

13章1節「すべての人は、上に立つ権威に従うべきである。なぜなら、神によらない権威はなく、おおよそ存在している権威は、すべて神によって立てられたものだからである」。日本語訳では、従うべきである」となっていますが、原語は「従え」と命令形であったと思います。パウロは、今までは「勧め」でありましたが、13章に入って、「命令」に変えています。現在立っている政府の権威は神が立てたものである。これが、パウロの国家、権威に対する考え方です。国家の権威を神の下においています。ある見方をすれば、これは国家の権威を下げたこととなりますが、信者から見れば、神の支配の下に国家、権威が置かれ、信者は神に従うが故にこの権威に従うことになるので、政府の値打ちを上げたこととなります。(P. 404)

ガンジー、ソクラテス、イエスの態度に学べ

本当に政府が悪い、これを打ち倒さねばならないという場合は、非常に稀であります。我々は、国権を尊重して宜しい。若し、特別な場合、すなわち、政府が非常に乱れている場合には、クリスチャンは平和なる手段を持ってこれに対処すべきであります。パウロは、ここでその点には触れておりませんが、パウロの精神を演繹すれば、そういうことになります。すなわち、口によって抗議をし、どこまでも武力に訴えずに、相手の反省を求める。丁度インドのガンジーのように、無抵抗主義をもって政府に抗議する、というのがキリスト者として、取るべき態度であると思います。

内村先生は、クロムウェルの英国革命、ワシントンの米国における独立戦争、これらは皆正義のための戦争と言われてはいるが、キリスト者から見れば、ソクラテスが国法に準じて死刑となったように、また、イエス・キリストが国法によって十字架に架けられたように、我々は殺されても反抗すべきではない、と言われました。これは、キリスト者の国籍が天に在るからであります。この世において、剣を抜いて自己防衛をする必要はないと言う。我々は、ソクラテスやイエス・キリストの態度を学ぶべきであります。 (P. 406)

己のごとく隣り人を愛するためにはどうすればよいか

神は自分のひとり子を降し給うて、そして十字架につけて、我々の神に対する債務を皆支払って、我々の罪咎を滅ぼして、永遠不滅の生命を与えて下さったのであります。神と我々との関係は、その賜物を信じると言う関係だけで十分であります。我々は神から受けた愛を人に向ける。私はこれが神のお喜びになることだと思えます。私は「己のごとく隣り人を愛せよ」というこの言葉のうちに、キリスト教全体が含まれているような気がします。そのわけは、自分が神の子とせられた信仰と、復活の望みを心に持って、そして口で「我が主イエスよ」と称えて、そして献身、すなわち目の前の自分の義務を果たす、これが己のごとく隣り人を愛するということの具体化であるからであります。隣り人に対する義務のみならず、親に対する義務、社会に対する義務、広く人類に対する義務もこれに尽きます。己のごとく隣り人を愛すると言うことに尽きます。神の子とせられた信仰、復活の望み、すなわち、神の贖いを受けていることを我々はいつも忘れ勝ちでありますから、我が主イエスの名を称えながら、自分の目の前の義務を尽くす、これで宜しい。これで己のごとく隣り人を愛していることになる。 (P. 411)

信・望・愛は、単数、一つのものの姿

12章10節「愛は隣り人に害を加えることはない。だから、愛は律法を完成するものである」。…この文は、原語は、「完成」「愛」などの名詞が並んでいるだけで、動詞はありません。非常に力強い調子です。この故に、愛は律法の完成であると言う。すなわち、神の子とせられた信仰、復活の望みを持って、口で我が主イエスよと称えて、そして目の前に置かれた義務をなすということは、律法の完成だと言うのであります。コリント前書13章には、愛、神の子とされた信仰、それに復活の望み、この三つが単数で表現されています。動詞は単数の動詞を使っています。信・望・愛、この三つは単数で、一つのものの姿であります。一枚の紙の裏表であります。神の子とせられた信仰、復活の望み、主の名を称え、そして献身。献身とは自分の目の前に置かれた義務をなすこと、これを愛という。これはイエス・キリストの贖いから流れ出る一つのものです。神の愛が我々の心に展開し、口に展開し、そして身の上に展開してくる。これを、すなわち「愛」と言うのであります。

このままで 我が主イエスの名を呼べば

我は知らずも 主共にいます (P. 412)